

岩手医科大学歯学会第25回例会抄録

日時：昭和63年2月27日（土）午後1時30分

会場：岩手医科大学歯学部講堂

演題1. 副下歯槽神経の走行と分析

○南幅 真治, 大澤 得二, 藤村 朗,
伊藤 一三, 野坂洋一郎

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座

昭和62年度本学歯学部解剖学実習に於いて、年齢72歳男性（屍体番号：1950）に左下歯槽神経が独立した枝として副下歯槽神経を分岐し、臼後枝、臼歯枝として分岐後、頬神経と吻合していた症例に遭遇した。本例は演者らが、渉猟し得た限りでは本邦に於ける5例目の症例である。独立した1本の枝が下歯槽神経が下顎孔に侵入する以前に分岐し、この枝は副孔（副下顎孔）に侵入後、下方に緩やかな弧を描きながら下顎枝内を前方に走行し、下顎枝前縁を貫き頬神経と吻合していた。この走行中臼後三角、大白歯部に分布する枝を分岐し、下歯槽神経と伴行する形で顎骨内を前走し下歯槽神経と合流していた。この間下歯槽神経、頬神経との吻合枝、臼後枝、臼歯枝の各々の直径は、2.3mm, 1.0mm, 0.8mmで分岐を繰り返す毎に細くなるが臼後枝、臼歯枝は下歯槽神経と合流するまで太さを殆ど変えず下歯槽神経の舌側寄りを走行していた。従って演者らは、この神経を副下歯槽神経と定義した。また動脈もほぼ同様の経過をたどるが、臼後三角、大白歯部への枝は下歯槽動脈より分岐していた。演者らは、本症例は小児顎骨下顎枝内面に多数認められる副孔と関連があると推察し、57例114例についてⅠ期（乳歯萌出前期）、Ⅱ期（乳歯萌出期）、Ⅲ期（乳歯列期）、Ⅳ期（混合歯列期）に分類し、各発育期の副孔の数及び存在部位についての検索を行ったところ、Ⅰ期：3.69±2.09%、Ⅱ期：3.50±0.71%、Ⅲ期：2.26±0.60%、Ⅳ期：1.69±0.79%で、各stage共に左右側に有意の差は認められなかった。加齢的に副孔の数が減少していくⅡ期からⅢ期の間には、副孔の数に著しい減少が認められた。又、存在部位は各発育期を通じ下顎孔周囲及び筋突起基部に多かった。

乳歯列完成までは、臼後部に至る枝は分岐が高く独立しており、加生歯が萌出してくる時期に大白歯部及び臼後部に分布する。本来この枝が下顎骨の成長過程で下顎管内に取り込まれ下顎管内で分岐した形態を取るものが、そのまま独立した副下歯槽神経として存在した症例と考えられた。

演題2. グラスアイオノマーセメントへのレジンの接着に関する基礎的研究

○西山恵美子, 久保田 稔

岩手医科大学歯学部歯科保存学第一講座

〔はじめに〕

レジンと象牙質は組成の複雑さや歯髄刺激の問題もあり、両者の接着には様々な問題がある。その欠点を補うため、グラスアイオノマーセメントを象牙質部分に塞填し酸処理した後にエナメル質部分をコンポジットレジンで修復するSandwich Techniqueが提唱され、臨床に使用されるようになった。しかし、酸処理・水洗時に、アイオノマーセメントの欠点である感水が起こる。そこで、アイオノマーセメントを感水させずにレジンとの接着を得る方法として、アイオノマーセメント硬化前にレジンを填塞する一回積層法を考案した。この接着状態を知るため、この一回積層法とこれまでのSandwich Techniqueの接着力を引張り試験を行い、その破断面を観察した。

〔実験材料ならびに方法〕

アイオノマーセメントはGC社製の充填用Fuji Ionomar Type IIおよび裏層用Lining Cementの2種類。コンポジットレジンにはMFR型の、3M社製の化学重合型Silarおよび光重合型Siluxの2種類である。これら、材料を一回積層法およびSandwich Techniqueにより填塞し、引張り試験により接着強さを測定、破断面を肉眼および電顕にて観察した。